

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・ 7

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・ 15

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻・・・・ 27

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻・・・・ 32

2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

看護学専攻・看護学専攻（平成 30 年度）

国立大学法人に開設された医学系研究科看護学専攻として、「知」の創出と人材育成における社会的役割とともに、わが国はもとより世界をリードできる専門職，研究教育職の育成が求められている。その中で，当専攻では，看護学の発展に寄与する教育・研究活動を目指して，教員の多くが文科省科学研究費を獲得し，重要な研究課題に取り組んでいる。成果は，国内外の学会等での発表の他，トップジャーナルの論文への掲載に向けて投稿，掲載されている。

若手研究者の育成においては，後述のリーディング大学院プログラムの推進，韓国の延世大学との学術交流，タイ王国・チュラロンコン大学ならびにチュラポーン王女医科大学との交流など，その範囲を拡大している。また，学部学生の国際的視野を広めるために韓国・延世大学，中国・上海交通大学，シンガポール・シンガポール国立大学への学生の派遣と受け入れのための短期交換留学制度の維持，充実に努めている。

学内の運営としては，博士後期課程学生の学位授与率の向上を目指して，拡大大学院委員会を開催して，学位審査の手順や準備等について広く情報共有を行い，教員の意識改革にも取り組んでいる。大学院生の獲得のためには，大幸キャンパスで行ってきた大学院説明会に加えて，本学医学部附属病院看護部・看護キャリア支援室と協働で行う附属病院職員対象の大学院説明会も行い，臨床と教育・研究の場である大学とをつなぐための活動も行っている。

H30 年度は，より高度な専門性を発揮できる助産師の養成をめざすための助産教育の大学院化について検討と準備を進め，助産師養成教育の学部から大学院に移行を決定した。併せて，大学院の組織改革に向けての検討を進めた。

1. 運営

1) 組織構成

平成 24 年 4 月の大学院講座化以降，基本的な組織は 2 講座制（基礎・臨床看護学講座，健康発達看護学講座）で，大学院教育等の運営にあたってきた。また，兼務の学部教育は，4 領域体制で対応し，基礎看護学 8 名，臨床看護学 9 名，発達看護学 8 名，地域・在宅看護 7 名（うち年度末退職 2 名）の計 32 名の教員構成で教育研究活動に当たった。

2) 運営状況

看護学専攻では，看護学専攻教授会（毎月 1 回，必要に応じて臨時開催），全教員による看護学専攻会議（毎月 1 回）を定例開催し，専攻の運営方針，委員会活動，日常の諸問題等への対応を行った。また，大学院委員会（毎月 1 回）を始め，各委員会の活動を通して，専攻内の教育研究活動のより円滑な運営と課題の抽出に取り組

んだ。

3) 医学部附属病院との連携

医学部附属病院看護部，看護学専攻，看護キャリア支援室の協力体制によりユニフィケーション委員会を定例開催し（毎月 1 回），看護教育の協働に関する各役割と連携の調整を行った。また，年に 2 回開催する看護専門委員会では看護部（看護部長，看護副部長，看護師長等），看護キャリア支援室，看護学専攻全教員が一堂に会して，実習等の現状と課題を共有し，うち 1 回は看護部との合同 F D を同日開催し，実習指導能力の向上にも努めた。

2. 教育活動

1) 学生について

学部：平成 30 年 4 月には新入生 82 名（女子 81 名，男子 1 名）が入学した。また，平成 31 年 3 月には，看護学専攻 84 名（女子 79 名，男子 5 名）が卒業した。
大学院：平成 30 年 4 月には博士前期課程 16 名（基礎・臨床看護学分野 6 名，健康発達看護学分野 10 名），博士後期課程 8 名（基礎・臨床看護学分野 5 名，健康発達看護学分野 3 名）が入学した。

また，平成 30 年度には，博士前期課程 17 名（基礎・臨床看護学分野 9 名，健康発達看護学分 8 名），博士後期課程 3 名（基礎・臨床看護学分野 1 名，健康発達看護学分野 2 名）が修了（満期退学後の学位取得を含む）した。

2) ガイダンス

平成 30 年 4 月 3～8 日に学部新入生（1 年生），新 2～4 年生，大学院新入生（前期・後期課程）に対して専攻共通・専攻別ガイダンスを行った。学習（修）計画，学生生活，感染対策，図書，情報，ハラスメント関係等，一部に倫理審査，国試・就職等に関するガイダンスを行った。

3) カリキュラム・資格等

学部：3 年次の 4 月に保健師・助産師各選抜試験を行い，保健師選抜は 17 名，助産師選抜は 8 名が合格し教育の充実に努めた。平成 31 年 2 月に保健師 16 名，助産師 5 名が，また看護師は 84 名が国家試験を受験し，全員が合格した。

大学院：看護学専攻博士課程（前期課程）のがん看護専門看護師（OCNS）コースは，38 単位カリキュラムに移行して教育のさらなる充実を図り，平成 30 年度 4 月入学者は 1 名，平成 31 年 3 月の修了者はなかった。小児看護 CNS コースは 26 単位カリキュラムを継続しており，平成 30 年 4 月の小児看護 CNS は 1 名であった。また，平成 31 年 3 月小児看護 CNS 修了者は 1 名であった。

リーディング大学院“ウエルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”は6年目となり、初めて5年1貫プログラム修了生(第1期生)輩出の時期を迎えた。平成31年3月時点における看護学専攻の履修生は、博士後期課程3年次(第1期生)1名、同2年次(第2期生)2名、博士前期課程2年次(出産により休学した第3期生1名および第4期生1名)2名、同1年次(第5期生)1名であった。博士後期課程2年次の1名は検査学専攻の履修生と共に全国のリーディングプログラムの年次イベントである「リーディング・フォーラム」に参加し優秀ポスター賞を受賞した。また、多文化共生特論(クロスカルチャートーク)を保健の学生が中心に企画運営にあたり活躍した。

4) 国際交流

学部：平成30年度についても、日本学生支援機構「海外留学支援制度」からの補助金を獲得することができ、延世大学(2名)、上海交通大学(2名)、シンガポール国立大学(4名)において病院実習、授業や演習への参加などの短期交換留学(8～10日間)を行った。海外からの学部生等の受入については、延世大学から2名、上海交通大学から2名、シンガポール国立大学から5名が来学し、約1週間の病院見学、授業への参加などのプログラムに参加した。ちなみに、これら留学生の受け入れに関しては、学生の国際交流ボランティアサークル SNUPY が中心となって、多くの学部生を巻き込んだ留学生との文化的交流が行われている。

大学院：名古屋大学-延世大学間学術研究集会は、H30年度は本学において11月3日に開催した。本専攻からは、4名の大学院生が発表した。そのうち大学院生2名は日本学生支援機構の補助を受けて10月に韓国延世大学において施設・病院見学や研究室訪問を行った。延世大学からは教員2名と大学院生2名が来学し、大学院生2名はその後引き続き4日間日本に滞在し、病院等の施設見学や大学院生ゼミの参加等を通して本学大学院生や教員との交流を行った。

5) 感染対策

保健学科感染対策委員会の方針に準じながら、看護学専攻における実習時期や内容に合わせて感染予防対策を行っている。専攻内感染対策委員会を中心に感染症抗体価検査の実施と結果の確認、ワクチン接種状況の把握、胸部レントゲン写真の結果の把握等に努め、各実習前にこれらの結果を病院の研修担当部門に報告している。また、実習中も学生に対して感染予防対策の徹底を図るとともに担当教員を中心に学生の健康状態の把握に努め、看護部や病院の感染部門と連携しながら、感染の予防や拡大を防ぐ活動を行っている。学内においても学生に対してガイダンス等で感染予防教育を行うとともに、インフルエンザワクチン接種の勧奨やインフルエンザの感染状況の把握に努めている。

3. 研究活動

看護学専攻教員は、各自主要な研究テーマに取り組み、科学研究費等の外部資金を得ながら研究活動をより遂行することに努めた。教授・准教授・講師による研究内容の一部を以下に示す。

太田 勝正 : 看護情報学・情報プライバシーに関する研究, 看護倫理・患者の尊厳に関する研究, タイにおける地域保健活動データベース構築のための研究, 放射線看護・放射線防護に関する研究

本田 育美 : 慢性の病をもつ人の健康行動（セルフマネジメントや疾病管理）に関する研究, 高齢者のヘルスプロモーションに関する研究, 看護師の臨床推論に関する研究

大島 千佳 : 看護技術の検証と開発, 睡眠に関する研究, 血液およびリンパに関する研究

竹原 君江 : 糖尿病足病変に対する予防的フットケア技術の開発に関する研究

安藤 詳子 : がん性疼痛緩和に関する研究, 終末期看護に関する研究, がん患者の症状マネジメントに関する研究

佐藤 一樹 : 緩和ケアの質評価方法の開発, ビッグデータを用いた終末期医療の実態調査, がん・非がん終末期の QOL や医療の質評価, 緩和ケアの提供体制に関する研究

池松 裕子 : 循環危機患者の自覚症状, クリティカルな状態の患者の QOL, 発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発, ICU 患者の褥瘡リスクアセスメントツール開発

中山 奈津紀 : 自律神経活動指標に関する研究, 循環器疾患患者の生活支援に関する研究, 消化器症状を訴える患者の生活支援に関する研究, 周術期におけるせん妄に関する研究, 運動と血液循環に関する研究, シミュレーション教育に関する研究

青石 恵子 : 精神障害者における長期入院患者の地域移行支援に関する研究, 中学生の自殺親和性に関する研究

- 渕田 英津子 : 認知症高齢者のケアに関する研究, 認知症高齢者の介護者支援に関する研究, 高齢者ケアの教育方法と評価に関する研究
- 浅野 みどり : Special needs をもつ子どもと家族の看護, 家族の価値観と強みを尊重した養育期の家族への予防的ケア, 子どもと家族の Well-being の探求
- 奈良間 美保 : 子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデルと実践推進システムの開発
- 玉腰 浩司 : 生活習慣病に関する研究, 母子保健に関する研究, 婦人科疾患・周産期疾患に関する研究
- 入山 茂美 : 母乳育児に関する研究, 産痛緩和ケアに関する研究, 思春期の若者の性行動に関する研究, 国際母子保健に関する研究
- 島 明子 : 女性のヘルスケアに関する研究, 地域の繋がりを活用した更年期ケア提供モデルの開発、周産期ケアに関する研究
- 高橋 由紀 : 哺乳探索行動と母子相互作用に関する研究, Skin-to-skin contact に関する実証的研究
- 榎原 久孝 : 生活習慣病の健康管理, 職場の保健管理, 物理的因子(振動)による健康影響
- 西谷 直子 : 生活習慣、職場ストレスと心身の健康に関する研究、職場の健康管理
- 前川 厚子 : 外来がん化学療法を受ける大腸がん患者の曝露対策に関する研究, スキンテアと創傷管理に関する研究, ストーマ保有者の QOD と終末期支援教育, ストーマ保有者の QOL と適応に関する研究, 小児期発症の炎症性腸疾患に関する研究, 在宅看護・介護用品の開発と安全性に関する研究
- 林 登志雄 : 訪問看護と在宅医療の研究, 終末期の医療と看護の研究, 細胞老化と動脈硬化症の研究, 高齢者糖尿病コホート研究と治療ガイドライン作成, 遺伝性(家族性)高脂血症研究, 東アジア女性健康長寿研究
- 渡井 いずみ : 産業看護に関する研究, ワーク・ライフ・バランス支援に関する研究, 減量プログラムに関する研究, 保健師活動に関する研究, 地域・職域におけるアルコール対策に関する研究

4. 対外的活動

1) 国立大学保健医療学系代表者協議会

国立大学保健医療学系代表協議会が平成 30 年 5 月 27 日に、同協議会看護学分科会が同年 5 月 28 日に、いずれも山口市で開催された。教員定員の削減の問題、文科省から示されたモデル・コア・カリキュラムの活用等、各大学で抱える課題について議論が行われた。

2) 日本看護系大学協議会総会

日本看護系大学協議会定時社員総会が、平成 30 年 6 月 18 日に東京で開催され、日本看護学教育評価機構の開設、JUNPU ナースプラクティショナーの資格認定の仕組みなどについて、説明及び審議がなされた。

(主任：太田 勝正)

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成 30 年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究目標は以下のとおりである。

- ・ さまざまな画像診断技術（CT、MRI、X 線、核医学装置、US など）の原理や特性を理解し、安全・確実に機器の能力を最大限発揮できるようにする。
- ・ 治療のために、人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 放射線が人体に及ぼす影響について幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識に加え、豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 日進月歩する医療分野の進歩を理解し、指導的立場となる医療技術者および放射線技術科学を学ぶ人々を指導する人材を育成する。
- ・ 自ら医療の進歩を創出し世界的な研究の一翼を担うことができる研究者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、放射線画像診断、放射線治療、線量測定、機器開発などの研究領域からなる大講座制で、講座主任を中心に講座の教員全員が参加する毎月 1 回の講座会議の審議・決定に従って行われている。また講座の教授で構成される教授会も必要に応じて開催されている。

2. 教育活動

学部教育：

平成 30 年度の学生は、1 年生が 39 名、2 年生は 41 名、3 年生は 41 名、4 年生は 47 名で、4 年生は指導教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。第 71 回診療放射線技師国家試験（平成 31 年 2 月 21 日実施）は 4 年生 44 名が受験し、そのうち 40 名が合格した（合格率 91%）。卒業生 46 名の進路は、医療機関に 31 名、大学院進学が 10 名、一般企業 1 名、その他 3 名であった。学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習など、将来医療現場で役に立つ教育活動が行われている。また、研究力の強化のため 3 年後期から卒業研究のための研究室配属を行っている。

大学院教育：

平成 30 年度は、前期博士課程 1 年 11 名、2 年 11 名、後期博士課程 1 年 2 名、2 年 2 名、3 年 4 名であった。前期課程では 10 名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。

以下、学生名と修士論文題目を記す。

- ・伊藤翔大：マルチパッチ照射における呼吸同期ゲートレベルを用いた照射野つなぎ目線量の改善
- ・梅田祐司：モンテカルロシミュレーションを使用した X 線 CT 画像における関心領域内の雑音分散に関する検討
- ・佐々木毬子：エネルギー弁別型フォトンカウンティングマンモグラフィ装置開発における物質鑑別に関する研究
- ・佐藤佳希：非イオン性ヨード製剤の薬剤特性に関する量子化学的検討
- ・鈴木怜奈：エネルギー弁別型フォトンカウンティングマンモグラフィシステムにおける contrast-to-noise ratio を用いた画像評価
- ・瀬野貞博：電子線の相互校交正法における不確かさ低減法の検討
- ・田嶋駿亮：7 テスラ MR 装置における高空間分解能 3 次元位相コントラスト磁気共鳴法を利用した脳血流動態解析の精度検証
- ・堀田 遼：放射線治療における新しい光学的三次元線量分布測定法に関する研究
- ・松澤伸一郎：PET 解析ソフトウェアの違いが standardized uptake value, metabolic tumor volume, total lesion glycolysis へ与える影響に関する研究
- ・椋本竜斗：I-123MIBG を用いた心筋交感神経シンチグラフィ検査における SPECT-CT データを利用した心縦隔比計測精度の向上に関する研究

後期課程では 2 名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。

以下、学生名と博士論文題目を記す。

- ・木下尚紀：標準計測法の違いによる校正深水吸収線量の違いおよび商用水ファントムの違いによる電離箱設置の不確かさの違いに関する研究
- ・栗山巧：Quantitative Analysis of Conebeam CT for Delineating Stents in Stent-Assisted Coil Embolization(ステント支援コイル塞栓術におけるステント描出のためのコーンビーム CT の定量的解析)

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。

以下には、各教員の研究領域を示す。

- ・池田 充 教授 : 被ばく線量と画質との関係に関する研究。医用画像の画質評価に関する研究。
- ・磯田治夫 教授 : 磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR 撮像技術・MR 画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。
- ・今井國治 教授 : 数理統計学及び情報理論を用いた医用画像の画質評価法の構築。造影剤の薬剤物性及び造影特性に関する研究。
- ・加藤克彦 教授 : ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の ^{131}I 内用療法。 ^{18}F -FDG、 ^{18}F -DOPA、 ^{11}C choline、 ^{11}C -methionine、 ^{18}F -FLT、 ^{18}F -Na 等を利用した腫瘍 PET/CT に関する研究。 ^{123}I -IMP を使用した SPECT 検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。
- ・島本佳寿広 教授 : 乳腺の画像診断に関する研究。超音波装置のディスプレイの性能および環境が病変検出に及ぼす影響に関する研究。読影環境と疲労度との関連に関する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。
- ・古川高子 教授 : 放射性同位元素を用いる分子イメージングに関する基礎研究 ; (a) 腫瘍イメージングのための分子プローブの開発・評価、(b) 標的アイソトープ治療に向けた分子プローブの開発・評価。
- ・山本誠一 教授 : PET 装置, ガンマカメラ, 複合イメージング装置などの医療機器の研究開発。放射線治療に関係したイメージングに関する研究。
- ・小口宏 准教授 : 電子線計測法 (水吸収線量計測、相互校正法) に関する研究、ポリマーゲル計測法の臨床応用に向けた開発、呼吸同期放射線治療に関する精度評価、画像誘導放射線治療 (IGRT) に関する精度評価。産業総合技術研究所との共同研究「フィールドにおける高エネルギー電子線水吸収線量校正の不確かさ評価と相互校正手順の標準化」に参画。
- ・小森雅孝准教授 : 陽子線治療における新規照射野形成法の開発。陽子線治療における中性子被ばくに関する研究。高エネルギー X 線治療計画装置の線量分布計算精度の評価。

- ・ 小山修司准教授 : 診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。新型マンモグラフィ装置の開発。MR 撮像技術に関する研究。
- ・ 砂口尚輝准教授 : 生体軟組織を高感度に撮像するための位相コントラスト X 線 CT の開発。蛍光 X 線 CT の開発
- ・ 平野祥之准教授 : 重粒子線治療における生物学的効果に関する研究。重粒子線モンテカルロ計算における精度の検証
- ・ 川浦稚代 講師 : 人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X 線 CT 検査における画質と線量の関係解明。
- ・ 福山篤司 助教 : MR 装置を用いた血管内血流動態の計測精度の検証と改善。Readout Segmented-Echo Planar Imaging を用いた QSI 解析。RESOLVE シーケンスで得られる ADC の精度検証
- ・ 藤井啓輔 助教(講師) : 実測およびシミュレーション計算に基づいた放射線診断検査における被ばく線量評価。画質および線量評価に基づいた CT 撮影条件の最適化に関する研究。
- ・ 本間光彦 助教 : 人体解剖実習体の X 線撮影・CT 撮影に関する研究。放射線カウンセリングに関する研究。CR の応用利用に関する研究。放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。
- ・ 余語 克紀 助教 : 放射線による水の発光を用いた放射線治療品質管理ツールの開発。放射線照射による生体分子の損傷解析と修飾薬剤の放射線治療への応用に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動。

- 1) 第 71 回診療放射線技師国家試験問題検討会の「基礎医学大要」の正科目責任者として国家試験問題の検討を行った (池田)。
- 2) 日本生体医工学会の代議員を務めた (池田)。
- 3) 日本生体医工学会東海支部の副支部長を務めた (池田)。
- 4) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を努めた (磯田)。
- 5) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた (磯田)。
- 6) 日本神経放射線学会の評議員を務めた (磯田)。
- 7) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の代議員を務めた (磯田)。
- 8) 日本低温医学会の理事を務めた (磯田)。
- 9) 日本生体医工学会東海支部の支部理事を務めた (磯田)。
- 10) 日本生体医工学会の代議員を務めた (磯田)。

- 1 1) 東海総合画像研究会の世話人を務めた (磯田)。
- 1 2) 脊椎・脊髄画像クラブの世話人を務めた (磯田)。
- 1 3) ニューロイメージングカンファレンスの世話人を務めた (磯田)。
- 1 4) 名古屋大学脳とこころの研究センターシンポジウムの企画に参画するとともに、演者を務めた (磯田)。
- 1 5) 「ポスト『京』重点課題②『個別化・予防医療を支援する統合生命科学』」諮問委員会 諮問委員を務めた (磯田)。
- 1 6) 厚労省指定規則改定に関わる会議に本学の代表者として 1 回出席した。(磯田)。
- 1 7) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会において、専門委員を務めた (今井)。
- 1 8) 一般社団法人日本核医学会の理事を務めた (加藤)。
- 1 9) 一般社団法人日本核医学会の評議員を務めた (加藤)。
- 2 0) 一般社団法人日本核医学会健保委員会の委員長を務めた (加藤)。
- 2 1) 一般社団法人日本核医学会編集委員会の委員を務めた (加藤)。
- 2 2) 一般社団法人日本核医学会派遣委員 (内科系学会社会保険連合) を務めた (加藤)。
- 2 3) 一般社団法人日本核医学会派遣委員 (外科系学会社会保険委員会連合) を務めた (加藤)。
- 2 4) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた (加藤)。
- 2 5) 公益社団法人日本医学放射線学会編集委員会委員を務めた (加藤)。
- 2 6) 北米放射線学会 (RSNA) 期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第 21 回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った (加藤)。
- 2 7) 日本核医学会において、理事会、評議員会、健保委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 2 8) 日本核医学会中部地方会の世話人を勤めた (加藤)。
- 2 9) 日本医学放射線学会において代議員会、編集委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 3 0) 日本医学放射線学会秋季臨床大会において、代議員会、編集委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 3 1) 東海核医学セミナーの事務局、世話人を務めた (加藤)。
- 3 2) 東海腫瘍核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 3) 東海脳神経核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 4) 東海循環器核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 5) 愛知診断治療技術振興財団の評議員を務めた (加藤)。
- 3 6) ヨーロッパ放射線学会 (ECR) 期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第 21 回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った (加藤)。

- 38) 愛知県放射線科医会常任理事を務めた(加藤)。
- 39) 愛知甲状腺研究会の世話人を務めた(加藤)。
- 40) 名古屋 PET 症例検討会の運営委員を務めた(加藤)。
- 41) ニューロイメージングカンファレンスの運営委員を務めた(加藤)。
- 42) 米国核医学会(SNM)に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った(加藤)。
- 43) ヨーロッパ核医学会(EANM)に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った(加藤)。
- 44) 北米放射線学会(RSNA)に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った(加藤)。
- 45) 第71回診療放射線技師国家試験 試験委員を務めた(加藤)。
- 46) 日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた(島本)。
- 47) 医用画像認知研究会の事務局として幹事を務めた(島本)。
- 48) 愛知県放射線科医会幹事を務めた(島本)。
- 49) 名古屋大学医師会理事を務めた(島本)。
- 50) 日本医学放射線学会中部地方会世話人を務めた(島本)。
- 51) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 "Radiological Physics and Technology" (RPT) 誌の編集委員として編集に従事した(山本)。
- 52) IEEE Nuclear Medical and Imaging Sciences Council の選出委員として委員会の運営を務めた(山本)。
- 53) 豪州、シドニーで行われた 2017 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference のプログラム委員、及び Hoffman award、Hasegawa award、Thompson award、Young Investigator award の選定委員を務めた(山本)。
- 54) 一般社団法人医学物理学会の計測委員として会の企画・運営に関わり、第115回日本医学物理学会学術大会の大会長として企画準備を行った(小口)。
- 55) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療専門部会委員長として学会の企画・運営に関わり、専門部会2回、放射線治療セミナーを3回開催した(小口)。
- 56) 公益社団法人日本放射線技術学会の第76回、第77回放射線治療部会で座長を行った(小口)。
- 57) 公益社団法人日本放射線技術学会の第49回、第50回放射線治療セミナーで座長を行うとともに、第51回では電子線相互校正法の講演と実技講習を行った(小口)。
- 58) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東 RT 研究会副代表として会の企画・運営に関わり、セミナーを5回、シンポジウムを1回開催した(小口)。
- 59) 一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会

を2回開催し、「放射線治療品質管理プログラム」についての講演を大阪市と東京都で行った（小口）。

- 60) 放射線治療品質管理士認定機構の理事として会の企画・運営に関わり、放射線治療品質管理講習会を2回開催、認定試験と認定審査を行った（小口）。
- 61) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術WG代表として会の企画・運営に関わった（小口）。
- 62) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・出版委員・学術委員として会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った（小口）。
- 63) 長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した（小口）。
- 64) 岐阜県立多治見病院放射線治療管理委員会の委員として2回の会議に参画した（小口）。
- 65) 社会医療法人財団新和会 八千代病院放射線治療管理委員会の委員として3回の会議に参画した（小口）。
- 66) 国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザリーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した（小口）。
- 67) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を4回開催した（小口）。
- 68) 平成29年度放射線治療専門放射線技師認定機構のセミナー講師（電子線計測）を行うと共に認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った（小口）。
- 69) 日本放射線技術学会の学術委員として研究、教育、学会の企画、提案を行った（小口）。
- 70) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構統一講習会基礎コース（関東1地区、関東2地区、東海地区）で電子線計測法の講演、計測実習を行った（小口）。
- 71) 平成30年度放射線治療専門放射線技師認定機構の認定指導者実機講習会（キャンノンメディカル那須工場）の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った（小口）。
- 72) 医療放射線管理委員会の委員として医用放射線の安全利用と管理にいて参画した（小口）。
- 73) 医療用線量等校正部会の委員として高エネルギー放射線のトレーサビリティ管理に参画した（小口）。
- 74) Varian Medical Systems の Medical Physics Consultation Program WG の委員として放射線治療の品質管理支援事業に参画した（小口）。
- 75) 名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長を務めた（小森）。
- 76) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌“Radiological Physics and Technology”（RPT）誌の編集委員を務めた（小森）。

- 77) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事を務めた(小森)。
- 78) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した(小山)。
- 79) 公益社団法人日本放射線技術学会計測部会委員として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 80) 日本 CT 技術学会理事として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 81) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した(小山)。
- 82) 計測自動制御学会の会誌出版委員を務めた(砂口)。
- 83) 一般社団法人日本医学物理学会の防護委員会の委員を務めた(藤井)。

(主任：山本 誠一)

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成 30 年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野からアプローチし、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論の展開や、新たな技術の開発およびその応用を教授・研究している。

平成 24 年 4 月には名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）での大学院講座化が実現し、病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の礎を着実に構築してきた。

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。

この 6 つの学問領域が先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成を推進している。

また教育の目標としては、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、チーム医療の積極的な推進、また産学官にわたりグローバルに活躍できる能力をもった、我が国の未来の保健医療を創る人材の育成を掲げている。

1. 運営

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の 6 つの学問領域からなる大講座であり、運営に関しては、領域間の壁をなくして一体化した体制を築いてきた。講座の運営は、講座主任（長坂）を中心に、全 17 名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われている。講座会議は、第 1、第 3 水曜日の 12 時、ならびに第 4 水曜日の 17 時から定期的開催され、必要に応じて臨時に開催されている。

2. 教育活動

- 1) 4 月に第 21 期の入学生 42 名（推薦入学生 17 名、前期日程入学生 25 名）を迎えた。
- 2) 4 月 3 日（火）の新入生ガイダンスには、教員と 1 年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活に関するガイダンス、教員の自己紹介と指導教員の確認、学生の自己紹介などが行われた。
- 3) 感染対策

病態解析学講座として、感染対策委員（川村久美子准教授）を中心に以下のごとく感染対策教育を行った。本学では入学時に風疹ウイルス、麻疹ウイルス、ムンプスウイルス、水痘ウイルス、B 型肝炎ウイルスに対するワクチン接種を義務づけており、新

年度開始時におこなわれる1~4年生の各学生ガイダンスの際に、感染予防の意義およびワクチン接種の重要性について指導するとともに各種ワクチンの接種状況を確認した(林由美講師)。さらに、3年次に行われる病原微生物学実習時では、感染防止への心得として「感染の成立と感染経路」や「滅菌と消毒」について、再度講義をおこなうとともに、初回実習時には衛生的手洗いの演習を導入するなど、学生実習における感染予防にも努めた(川村久美子准教授)。また、4年生の臨地実習前には、全員がワクチン接種および抗体検査を終了し、名古屋大学医学部附属病院での臨地実習受け入れ基準を満たしていることを再度確認するとともに(林由美講師)、臨地実習直前におこなわれるガイダンスにおいては、臨床検体を扱う上での感染予防対策実施の意義、標準予防策および感染経路別予防対策の実施方法について指導し、さらに各種感染症診断のための検査方法とワクチン接種の意義についての講義もおこなった(川村久美子准教授)。

- 4) 4月25日(水)には検査技術科学専攻の2年生が中心になって、教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。
- 5) 5月8日(水)には第18期生の臨地実習を充実させることを目的に、病態解析学講座教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との実習前の合同会議(第1回臨床検査専門委員会)を開催した。臨地実習は6月4日(月)から7月27日(金)まで医学部附属病院(検査部・輸血部・病理部)で実施された。9月18日(火)に実習後の合同会議(第2回臨床検査専門委員会)を開催し、実習での反省点の確認と白衣の脱着ルールなどについて検討した。また、カリキュラム変更に伴い、11月8日(火)に第19期生の臨地実習に対し、第1回臨床検査専門委員会を開催した。臨地実習は12月10日(月)から3月8日(金)に実施された。

6) オープンキャンパス

8月10日(木)に大幸キャンパスで実施し、申込者数203名に対して来場高校生数は207名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、参加者が研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。

7) ホームカミングデー

平成30年度10月20日にホームカミングデー大幸キャンパスイベントを検査技術科学専攻が担当した。暮らしと健康を守る最新検査法と題した市民公開講座を開催し、上山純准教授および佐藤光夫教授が講演を行った(司会 川部勤教授)。その後、顕微鏡を用いた細胞等の観察や大学院生によるポスター形式の研究発表を行った。

- 8) 8月29日(水)に大学院医学系研究科博士課程(前期課程)の入学試験を実施し、医療技術学専攻病態解析学分野では11名の合格者(全員一般選抜)を決定した。また、8月30日(木)に同分野博士課程(後期課程)の入学試験を実施し、2名の合格者(一般選抜1名、社会人1名)を決定した。

- 9) 平成 31 年 2 月 1 日（金）には私費留学生入学試験を実施したが、合格者はいなかった。
- 10) 平成 31 年 3 月には、本専攻の第 18 期生の 42 名が卒業した。そのうち 11 名については進学【10 名が大学院博士前期課程（医学系研究科病態解析学分野）、1 名が本学大学院情報学研究科】し、30 名については公立病院、一般病院の検査部門、検査センターおよび民間企業に就職した。1 名国家試験不合格で内定取り消しとなった。大学院医学系研究科病態解析学分野（博士前期課程）の第 16 期生の 14 名全員が修了した。また前期課程修了者のうち 1 名が本学大学院博士後期課程に進学した。前期課程修了者は大学病院や一般病院の検査部門、および民間企業に就職し、就職率は 100% であった。博士課程（後期課程）では 6 名が修了し、1 名他大学、1 名企業に採用され、4 名の社会人学生は継続である。
- 11) 臨床検査技師国家試験に対する準備として、全教員による教育指導と 6 回の模擬試験を実施した。第 65 回国家試験（平成 30 年 2 月 20 日実施）の新卒および既卒者の合格者数は各々、41/42（合格率 97.6%）、0/4（合格率 0%）であった。
- 12) 平成 30 年度の教育活動の成果として、青山清志（M2）は名古屋大学大学院博士課程教育リーディングプログラム PhD プロフェッショナル登龍門において総長表彰を受け、Certificate of Outstanding Achievement を授与された。服部有那（M2）は第 80 回日本血液学会学術集会で優秀ポスター賞を受賞した。垣原美紗樹（M2）と服部有那（M2）はアジア太平洋血栓止血学会学術集会（APSTH2018）でそれぞれ Poster award を受賞した。

3. 研究活動

本専攻では 4 月に博士課程（前期課程）に 15 名の第 17 期生、博士課程（後期課程）に 1 名の第 15 期生を迎えた。

平成 31 年 1 月 26 日（土）に修士論文発表会を開催し、前期課程第 16 期生 14 名が成果を発表した。

平成 30 年 9 月 26 日（水）には後期課程予備審査会（研究発表会）を開催し、4 名が研究成果を発表した。

学部関係では 5 月 27 日（日）に、第 18 期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各部門における卒業研究発表演題を示す。

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

1. 親和性成熟を誘導する分子群の中での CD40 の重要性
2. アレルギー性結膜炎の発症機序における CD40 の関与
3. AIHA モデルにおける IgM 自己抗体の意義
4. アトピー性皮膚炎モデルにおける B 細胞の解析

5. 在宅医療患者および長期療養型施設入所者が保菌するメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)の分子疫学解析
6. CTX-M-15 産生 *Klebsiella pneumoniae* K23-ST280 はアミノグリコシド耐性遺伝子および plasmid 性キノロン耐性遺伝子を保有し多剤耐性化する

【生体生理解析学部門-1】 指導教員：永田浩三 内仲彩子

7. メタボリックシンドロームの心筋および脂肪病態に及ぼす食塩負荷の影響—ミトコンドリア機能および心臓自律神経活動との関連—
8. PTEN 阻害薬はメタボリックシンドロームラットにおいて脾臓の制御性 B 細胞を増加させるとともに皮下脂肪炎症を抑制する

【生体生理解析学部門-2】 指導教員：平山正昭

9. 水素水投与による健常マウス腸内細菌叢の変遷
10. 16s rRNA 解析による本邦および既論文でのパーキンソン病患者と健常者の相違
11. 誘発脳磁界を用いた pre-stimulation での感覚野の時間周波数と接続性変化

【環境病因解析学部門】 指導教員：石川哲也 近藤高明 林由美

12. 高脂肪食によって惹起される重症型肝障害の発症機序および脂肪由来幹細胞治療への応答性について
14. 異なる簡易型身体活動量計間での歩数記録の相関—装着部位と歩行速度の影響について—
15. 異なる簡易型睡眠記録計間での睡眠関連指標の相関

【病態化学解析学部門】 指導教員：佐藤光夫 上山純

16. 小児の尿中新規ピレスロイド系殺虫剤曝露マーカーの基本特性の理解
17. 尿中忌避剤 DEET とその代謝物の分析法の検討
18. フリーズドライ技術を用いた尿の室温保存—殺虫剤曝露マーカー分析への影響
19. 便中短鎖脂肪酸分析における凍結乾燥処理の有用性と一般生活者集団の個体内／個体間変動

【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂徹郎 川井久美 橋本克訓

20. 病理組織標本作製における伸展条件の影響とその解析
21. 甲状腺髄様癌モデルマウスにおける分子標的薬スニチニブの有効性の検討
22. 浸潤性乳癌におけるバーシカンの発現に関する研究

【分子病態解析学部門】 指導教員：小嶋哲人 早川文彦 田村彰吾

23. 血液凝固第 XI 因子欠乏症 2 症例の遺伝子解析
24. プロテイン C 欠乏症患者の PROC 解析

- 25 血友病 B 中等症症例におけるイントロン深部大挿入変異とその影響
- 26 血友病 A 症例における血液凝固第 VIII 因子の遺伝子解析

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

開始以来9年目を迎えた延世大学（韓国）との国際交流事業では、11月2～4日に大幸キャンパスを会場に交流プログラムが実施され、病態解析学講座からは5名の大学院生（松下真也、浜田梨沙、青山清志、垣原美紗樹、服部有那）が研究成果について口頭発表と質疑応答を行なった。交流会終了後、2名の延世大学大学院生が11月9日まで日本に滞在し、研究室訪問や学外文化施設見学などを行なった。さらに2019年2月13日から20日まで2名の本学大学院生（垣原美紗樹、服部有那）が延世大学を訪問し、研究室・大学施設の見学を行って交流を深めた。交流の成果については3月15日に開催された合同報告会で披露された。この交流事業組織委員会には国際交流委員の近藤高明教授と上山純准教授が出席し、企画や運営の役割を担った。

9月2～10日にタイのマヒドン大学アセアン保健開発研究所の協力のもと、「タイ保健学科医療体験入門プログラム」が実施され、7名の検査技術科学専攻学部生（2年生4名、3年生3名）が短期研修に参加した。研修期間中には農村部でのヘルスセンター、郡レベルや県レベルでの病院、タイ最大の医療機関であるシリラート病院と附属医学博物館、農村部でのヘルスボランティア活動現場、マヒドン大学検査技術科学部、国連人口基金バンコクオフィス、JICAによるタイ国地域包括ケア開発プロジェクト、文化施設などを訪問し、医療機関スタッフ、大学教員・学生、現地で活躍する日本人スタッフと交流を行った。このプログラムには近藤高明が引率教員の1名として同伴した。

小嶋哲人教授は、7月に札幌で開かれたアジア太平洋血栓止血学会学術集会（APSTH2019）に出席し、Symposium Enlarging horizon of thrombosis and hemostasis: emerging new therapeutic targets において演者として演題名：Antithrombin resistance: a unique inherited thrombophilia の講演を行い、世界の研究者と様々な情報交換を行った。また APSTH2019 では指導大学院生2名（ポスター2題）の発表を指導した。

永田浩三教授は、9月に中国 Beijing で開催された第27回国際高血圧学会において口頭発表を行うとともに、海外の研究者との情報交換を行った。また、同月に大阪で開催された第66回日本心臓病学会学術集会において、留学時のボス（Liao R スタンフォード大教授）が招かれたミート・ザ：エキスパート3において招待講演（演題

名：「Looking Back on My Life in Boston」を行った。

内仲彩子助教は、8月に米国 San Antonio で開催された The Basic Cardiovascular Sciences 2018 Scientific Sessions に抄録がポスター発表として採択された。

佐藤光夫教授は、2018年9月にトロントで開催された第19回世界肺癌学会において3演題（①EIF2 β , A SUBUNIT OF TRANSLATION-INITIATION FACTOR EIF2, AS A POTENTIAL THERAPEUTIC TARGET FOR NON-SMALL CELL LUNG CANCER②MECHANOBIOLOGY OF LUNG CANCER CELLS: REGULATION OF PD-L1 EXPRESSION BY MATRIX STIFFNESS③SHORT HYDRATION REGIMEN WITH A MODIFIED DOSE OF MAGNESIUM SUPPLEMENTATION FOR LUNG CANCER PATIENTS RECEIVING CISPLATIN-BASED CHEMOTHERAPY）のポスター発表を共同演者として行った。さらに同学会に先立って、佐藤教授の留学先であったテキサス大学サウルメディカルセンターの John Minna ラボおよび共同研究者である Jerry Shay ラボを訪問し、自身の研究に関する意見交換を行った。

川部 勤教授と松島充代子講師は、7月開催された 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology において指導大学院生2名（ポスター2題）の発表を指導した。また、松島充代子講師は同学会においてポスター発表を行った。

早川文彦教授は、急性リンパ性白血病の次世代シーケンス技術による遺伝子解析と治療成績に関する国際共同研究に参加しその成果を論文発表した（Li JF, et al. Transcriptional landscape of B cell precursor acute lymphoblastic leukemia based on an international study of 1,223 cases. Proc Natl Acad Sci U S A. 2018 Dec 11;115(50):E11711-E11720.）。また12月に米国サンディエゴで行われた第54回米国血液学会年次総会に出席し、大学院生のポスター発表（筆頭演者）を指導した。

平山正昭准教授は、8月に行われた XXIII World Congress on Parkinson's Disease and Related Disorders、10月に行われた International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders、11月に行われた Neurosciencにてポスター発表を行った。International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders の発表はブルーリボン賞の候補となった。また、3月の Takamatsu International Symposium for PD & MD にて講演した。

川村久美子准教授は、平成25年10月から博士課程教育リーディングプログラム「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムに協力教員として参加している。プログラム内ではアドミッション・リクルート WG に参画

し、6リーディング合同プログラムなどの企画運営に携わることで積極的にリクルート活動を行なった。また、プログラムの協力教員として、講義グローバルリーダーにおける講師招聘や海外実地研修の企画を行なうとともに、平成31年1月に行なわれた海外実地研修I(フィリピン)の企画運営に参画した。そして、平成31年3月にはプログラム第1回生20名の修了を迎えた。

田村彰吾助教は、アジア太平洋血栓止血学会学術集会 (APSTH2019) に出席し、所属研究室の大学院生2名の発表の共同演者としてポスター発表を行った (2題)。第80回日本血液学会学術集会で催されたシンポジウム Rising star in JSH [血液学会の輝ける若手研究者] で Peri-arteriolar megakaryopoietic microenvironment via reciprocal CLEC-2/PDPN axis in mouse bone marrow の発表を行った (演題番号 SY7-6)。第40回日本血栓止血学会学術集会 (2018年6月) の学術推進委員会 (SPC) シンポジウムで演題「Many of the prothrombin mutations in the sodium-binding region cause an antithrombin-resistance phenotype」と、日本血栓止血学会学術奨励賞受賞講演「Peri-arteriolar megakaryopoietic microenvironment via reciprocal CLEC-2/PDPN axis in mouse bone marrow」をおこなった。さらに同学会中に一般演題9演題の共同演者として研究成果を発表した。また、第13回日本血栓止血学会学術標準化委員会 (SSC) シンポジウム (2019年2月) 血栓性素因部会にて「トロンビン Na binding region のミスセンス変異は多くがアンチトロンビン抵抗性を示すが、凝固活性も低下する」を発表した。

B) 大学間交流

5月11日(金)に岡山で第55回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催され、全国20校の代表が参加した。本学からは長坂徹郎主任が代表として出席した。会長校である岡山大学の廣畑聡議長の議事進行で臨床検査技師の育成に関する教育、研究などの諸問題について活発な議論が行われた。5月28日(月)と12月17日(月)には、日本臨床検査学教育協議会の各々定時総会と臨時総会が東京医科歯科大学で開催され長坂徹郎主任が代表として出席し、同協議会の活動状況を把握するとともに、全国の臨床検査技師養成施設の代表と情報交換を行った。

永田浩三教授は、8月に札幌で開催された第13回日本臨床検査学教育学会学術大会のシンポジウム I-3 にて招待講演 (演題名:「次世代リーダーを育成するための臨床検査技師教育のあるべき姿とそれに向けた取り組み—国立大学の立場から」) を行い、他の施設の参加者と意見交換を行った。

近藤高明教授は、全国多数の大学と研究機関が参加しているがんコホート研究 (J-

MICC Study) や複数の大学研究者が共同で実施している北海道八雲町調査 (8月下旬に実施) に参加している。これらの研究成果は6月に開催された第54回日本循環器病予防学会学術大会、7月に開催された第64回東海公衆衛生学会学術大会、および2019年1月に開催された第29回日本疫学会学術総会で大学院生により発表された。

佐藤光夫教授は、2018年5月に東京で開催された第41回日本呼吸器内視鏡学会学術集会において演題名「非結核性抗酸菌症類似の画像所見を呈し、radial EBUS 下生検にて診断した胆管癌多発肺転移の一例」のポスター発表を行った。また、2018年9月には大阪で開催された第77回日本癌学会学術総会において演題名「非小細胞肺癌に対する新規治療標的としての転写開始因子 EIF2 サブユニット EIF2 β 」の口頭発表を行った。

石川哲也教授は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構研究費「肝炎等克服実用化研究事業 (B型肝炎創薬実用化等研究事業)」の2つの研究班「イムノ・オミクス研究を基盤としたB型肝炎に対する治療法の開発」(代表: 国立国際医療研究センター肝炎・免疫研究センター、考藤達哉センター長) と「獲得免疫反応の賦活化により核内 HBV cDNA を排除する手法の開発」(代表: 福井大学学術研究院医学系部門・内科学(2)分野、中本安成教授) に研究分担者として参加し、さらに「実用化に向けたB型肝炎新規治療薬の探索及び最適化」(代表: 名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学、田中靖人教授) に研究協力者として参加している。これらの研究班においては、岐阜大学大学院病態情報解析医学、伊藤弘康准教授、熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学、佐々木裕教授らと研究を行っている。また、名古屋市立大学大学院薬学研究科、松永民秀教授らとも共同研究を行っている。

川部勤教授と松島充代子講師は、中部大学応用生物学部山本 敦教授らとともに推進してきた共同研究について、公益財団法人科学技術交流財団の度研究会支援事業に平成28年に続き平成30年度も採択され、2年間の「ヒト呼気による血中および肺組織の薬物動態解析に関する研究会」を発足した。一連の研究会は松島充代子講師が座長として運営している。また、広島市立大学情報科学研究科式田光宏教授、長谷川義大先生と共同で(基盤研究(C) 研究代表者長谷川義大) 研究を推進し、中日新聞や中国新聞に記事が掲載され、CBC ラジオでも研究内容が紹介された。さらに本研究は(株)コスモスウェブも参加し、経済産業省東北経済産業局の「平成30年度戦略的基盤技術高度化支援事業」として採択され、産学医工連携共同開発事業として現在展開中である。

長坂徹郎教授は、大学院研究、教育の一環として名古屋市立大学病院病理診断部の山下依子准教授と婦人科領域の腫瘍に関する分子病理学的研究を行った。

早川文彦教授は、日本医療開発機構の革新的がん医療実用化研究事業の研究班「AYA 世代急性リンパ性白血病の小児型治療法および遺伝子パネル診断による層別化治療に関する研究」の代表を務め、白血病の多施設共同臨床研究団体である Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG)、名古屋医療センター 安田貴彦 臨床研究事業部・生体情報解析室長などと共同研究を行った。また 10 月に東京で開催された第 80 回日本血液学会学術集会で座長を務め、大学院生 1 名の口頭発表（筆頭演者）を指導した。

平山正昭准教授は、平成 28 年度から革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 α -synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、共同研究者の岡山旭東病院・神経内科部長・柏原健一、岩手医科大学医学部内科学講座・准教授・前田哲也、福岡大学医学部神経内科学・教授・坪井義夫と連携し、臨床部門での検体採取を担当し、国立遺伝学研究所・教授・黒川顕、助教・森宙史と共同で腸内細菌の解析を行っている。愛知学院大学 心身科学部・健康栄養学科・教授・丸山和佳子と唾液中の酸化ストレスマーカーについて共同研究している。また、第 12 回パーキンソン病・運動障害疾患コンGRESS、第 71 回自律神経学会総会において大学院生のポスター発表の指導をした。

川村久美子准教授は、11 月に開催された第 47 回薬剤耐性菌研究会に参加し、指導学部生 1 名、修士学生 2 名の口頭発表を、また 2019 年 2 月に開催された第 0 回日本臨床微生物学会に参加し、修士学生 2 名のポスター発表を指導した。また、藤田医科大学医学部微生物学講座 土井洋平教授と共同研究を行い、その成果は 2019 年 1 月に開催された日米医学 ARI（急性呼吸器感染症）部会にて発表された。さらに、藤田医科大学医学部微生物学講座 鈴木匡弘准教授との共同研究において、「肺炎桿菌における新規疫学解析法 PCR-based ORF Typing 法」を開発し、2019 年 1 月に特許申請を行なった。

川井久美准教授は、平成 27 年度から「蛍光点滅観察による RNAI 塩基変異の 1 分子病理診断」に分担研究者として参加し、大阪大学産業科学研究所、川井清彦准教授と共同研究を行っている。この研究成果をもとにキャノン財団研究助成を平成 29 年度より受けており、CTNNB1 および IDH1 遺伝子変異の検出の研究を行っている。

上山純准教授は、平成 28 年度から名古屋市立大学上島通浩教授とともに基盤研究 B[低用量殺虫剤曝露の代謝物プロファイリング：エクスポソーム導入へのマイルストーン]をうけ、短半減期化学物質曝露状況の評価法開発に現在取り組んでいる。平成 30 年度革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 α -

synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、便中短鎖脂肪酸分析を担当している。平成30年9月3日に神戸常盤短期大学にて教員を対象に「K T U研究を支援する研修会～研究活動のさらなる活性化をめざして～」と題した講演を行った。

C) 地域との連携

永田浩三教授は、日本循環器学会社員、日本高血圧学会評議員（学術委員）、日本心不全学会評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。名古屋大学予防早期医療創成センター教授（兼任）および日本循環器学会東海支部の院内調査に関する派遣医師候補者を務めた。大幸地区産業医として教職員の健康管理に尽力した。名城大学附属高等学校・学校評議員として学校運営および高大接続のために尽力した。2019年1月より医療法人名古屋澄心会名古屋ハートセンター/看護師特定行為研修管理委員会の外部委員を委嘱され、制度の運用に貢献している。

近藤高明教授は、平成14年から愛知県犬山での健康まちづくり推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成30年度が犬山市で実施されている10年計画である健康プラン21の中間評価年であることから、中間評価委員会の会長として評価の取りまとめに協力してきた。また平成30年7月からは、長久手市地域保健対策推進協議会およびその成人保健部会委員としての委嘱をうけ、いずれも会長として議事進行と意見の取りまとめに協力した。8月下旬に北海道八雲町で3日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同による疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として2名の大学院生とともに参加しその成果を町民の予防活動に還元するよう努めた。また名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、トヨタ自動車の支援をうけて豊田市とともに立ち上げた「豊田健康ナビゲーター倶楽部」の運営活動に参加した。また厚労省が推進している健康保険組合主体の「データヘルス事業」の一つに山田純生教授（理学療法学講座）とともに参加し、企業従業員の健康推進活動を支援した。

石川哲也教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本消化器病学会評議員、同東海支部評議員、日本肝臓学会評議員、同西部会評議員として学会活動の活性化に尽力した。特に消化器病学会においては、専門医管理システム委員会の委員として専攻医登録システムの運用などの議論に参加した。

川部勤教授は、日本免疫学会評議員、アレルギー学会代議員、日本呼吸器学会代議

員、日本職業・環境アレルギー学会評議員、日本内科学会東海支部評議員、日本呼吸器内視鏡学会中部支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。さらに、第30回医学会総会中部2019の展示委員として中部8県で開催されたイベントへの出席も含め、委員会活動を行った。また松島充代子講師とともに名古屋大学工学研究科西澤典彦教授とOCTによる肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。

川部勤教授は、平成30年8月に日本呼吸器内視鏡学会開催の第23回呼吸器インターベンションセミナー、平成30年11月に第39回日本レーザー医学会総会で招請講演を行った。また平成31年2月に名古屋市が主務で開催された第48回大気汚染公害認定研究会に招請され、討論者として議論に参加した。市民に対する啓発活動としては、平成30年6月に知多市と知多保健所が共催する呼吸教室の講師、平成30年10月には名古屋市の成人喘息教室の講師、また平成31年2月には名古屋市主催のぜん息講演会で招請講演を行い、平成31年3月には日本アレルギー協会理事、東海支部支部長として第25回アレルギー週間事業を第30回医学会総会中部2019共催のもと疾患啓発イベントとして、同協会東海支部事務局代表の松島充代子講師と共に主催するなど地域医療への活動、情報提供、啓発活動を行った。さらに川部勤教授は東海喘息研究会をはじめとする研究会の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力し、平成23年より特定非営利活動法人中日本呼吸器臨床研究機構の監事、また特定非営利活動法人愛知県COPDネットワークの監事として機構の運営に関わっている。また、川部勤教授は名城大学名古屋ドーム前キャンパスの校医として学校保健事業にも参加している。

長坂徹郎教授は、6月10日(日)には、日本臨床細胞学会東海連合会の幹事として細胞診基礎講習会の講師を担当し、子宮内膜、卵巣の細胞診に関する教育講演を行った。日本病理学会、国立がんセンターがん対策情報センター病理コンサルタントの委託を受け、婦人科領域の病理診断コンサルテーションを行ってきた。

佐藤光夫教授は、2018年10月大幸キャンパスで開催された名古屋大学ホームカミングデー・市民公開講座においてタイトル名「肺癌のバイオマーカー検査の進歩と個別化治療」の講演を行った

早川文彦教授は、日本血液学会社員(ガイドライン委員)として学会活動の活性化に尽力した。

平山正昭准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授(兼任)としている。全国学会として、日本神経学会、日本自律神経学会、日本末梢神経学会の評議員を行っている。地域ボランティアとして、日本パーキンソン病友の会愛知県支部の

顧問を務め、年4回の地域講演活動、友の会会員旅行、2ヶ月に1回の会報の執筆を継続して行っている。患者団体が主催する日本パーキンソン病コンGRESの開催の運営に参加している。

川村久美子准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として参画しており、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。また、日本臨床微生物学会および日本細菌学会中部支部会の評議員として学会活動の活性化に尽力した。

上山純准教授は、環境省化学物質の人へのばく露量モニタリング調査に関するタスクフォース委員として、事業の設計等について議論した。愛知県衛生研究所運営委員会委員として、調査研究、試験検査等について審議した。日本衛生学会評議員と日本医用マスペクトル学会評議員として学会運営に協力した。日本産業性学会の許容濃度委員会にて臨時起案委員として招集され、農薬の許容濃度に関する取りまとめに尽力した。名古屋第二赤十字病院における治験審査委員会にて、外部委員として審議に参加した。愛知県ペストコントロール協会の特殊健康診断に殺虫剤ばく露評価を採用し、その尿中殺虫剤代謝物分析の実施に貢献した。環境省エコチル調査曝露評価専門委員会精度管理分科会委員として招集され、精度管理に関する議論を行った。

橋本克訓助教は、愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の副班長として活動し、病理・細胞検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。平成30年7月1日に開催された第18回愛知県医学検査学会では実務委員を務め、学会の企画・運営に携わった。本学会では養成校ブースと病理・細胞検査部門の演題発表の座長を務めた。養成校ブースでは主に中学・高校生に臨床検査技師の仕事内容や名古屋大学での学生生活などを紹介した。9月16日には同研究班主催の基礎講座（テーマ：肺がん Up to date）を大幸キャンパスで開催し、実務委員を務めた。また、同会において平成26年度より病理検査部門の精度管理を担当しており、平成30年度はフォトサーベイを実施するにあたり実務委員を務め、病理検査部門の精度向上に貢献した。また、7月14日に開催された第3回中部圏認定病理技師企画病理技術研修会（テーマ：そうだったのか！包埋・薄切）では、認定病理検査技師として病理標本作製における薄切切片の伸展についての講演を行い、病理組織標本作製における精度管理の重要性を啓蒙した。

田村彰吾助教は、愛知県臨床検査技師会フレッシュセミナーで新卒臨床検査技師向けに養成校からのメッセージのプレゼンテーションを、同会遺伝子染色体研究班の基礎講座の講師として「PCRの基礎から応用－出血性・血栓性疾患の遺伝子解析を例にして－」の教育講演を行った。

（主任：長坂 徹郎）

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻（平成 30 年度）

理学療法学は、身体組織および機能の低下、あるいは能力の制限を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠な医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。

そのために、機能不全の原因となる病態や発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、機能・能力の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法法の基盤を創造する。

また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

1. 運営

本専攻は、2012 年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数 8 名）による講座会議（毎週 水曜日 12 時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。

さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第 1, 3 水曜日）を行っている。

2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療学分野と作業療学分野を併せて一講座としているため、便宜上、理学療学分野と記述している。

○平成 30 年度の具体的活動内容

学部生としては、4 月に保健学科理学療法学専攻第 21 期生として 22 名の学部学生を迎え入れた。性別は男子学生 14 名、女子学生 8 名であった。選抜方法による内訳は、推薦入学 9 名、前期日程試験入学 12 名、私費外国人入学 1 名であった。大学院には、前期課程に 11 名（一般選抜 8 名）、後期課程 2 名（一般選抜 0 名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1 年生 22 名、2 年生 18 名、3 年生 22 名、4 年生 32 名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療学分野の 1 年生 11 名（一般選抜 7 名）、2 年生 11 名（一般選抜 10

名)、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学分野は 1 年生 2 名(一般選抜 0 名)、2 年生 4 名 (一般選抜 1 名)、3 年生 5 名(一般選抜 2 名)となった。

新学期には 4 月 3 日 (火) 午前中に新入生に対する全体ガイダンス、午後からは作業療法学専攻とともに新入生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせも行った。4 月 6 日 (金) には、新大学院生を対象とした全体ガイダンス、情報関係ガイダンスに続いて、リハビリテーション療法学専攻によるガイダンス、在校生ボランティアからの説明等があった。4 月 5 日 (木) 午前中に入学式が行われた。4 月 6 日 (金) には 2-4 年生を対象とした在校生ガイダンスを行った。この在校生ガイダンスでは、共通科目については理学療法学・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に 1 時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・確認が行われた。説明は、主任、教育・FD 委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4 月 7 日 (土) には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新 2 年生が幹事となり、土曜日半日を使い、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会(大幸 厚生会館)を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4 月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる 4 年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習を行い、4 月 23 日 (月) から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は、各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は、多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5 週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、この実習を終えることが出来た。6 年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は、7 月 6 日 (金) に終了した。4 年生は 7 月 10 日 (火) に臨床実習反省会を行い、7 月 11 日 (水) に理学療法セミナーⅡの一部として、実習で担当した患者様の症例報告会を行なった。理学療法セミナーⅡはさらに吸引療法の理論と実際について、非常勤講師とともに看護学専攻教員、理学療法学専攻教員らがそれぞれ担当して行った。

また、4 年生を対象として地域理学療法学実習が 7 月 17 日 (火) ~24 日 (火) の期間、3 つのグループに分かれて行われた。地域理学療法学実習は、デイサービスおよび訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として 8 月 7 日~8 月 8 日の 2 日間、病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提

供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

平成 30 年度大学院博士前期課程入学試験は 8 月 29 日（水）、同後期課程入試は 8 月 30 日（木）にそれぞれ実施し、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に 11 名（一般選抜 8 名、社会人特別選抜 3 名）、博士後期課程理学療法学講座に 2 名（一般選抜 0 名、社会人特別選抜 2 名）が合格した。

9 月 26 日（水）には博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第 5 講義室で行われ、理学療法学講座からは 4 名の学生が発表した。

第 9 回目となる韓国延世大学との学術交流会が企画され、延世大学理学療法学専攻の大学院生 5 名を開催地である本学大幸キャンパスに迎え、11 月 2 日（金）から 9 日（金）にかけて学術交流と親睦を深めることができた。また、11 月 12 日（月）から 16 日（金）にかけて、本学の大学院生 2 名が延世大学原州キャンパスを訪問し、学術研修や国際交流を図る機会をもった。

秋学期授業では 4 年生の卒業研究の後半部分が再開され、11 月 28 日（水）に本館第 2 講義室において最終発表会が開催された。22 題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2 年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3 年生の卒業研究中間発表会は平成 31 年 3 月 8 日（金）に本館第 2 講義室で行われた。合計 19 題の発表があり、学生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、9 月 26 日（水）に博士後期課程 3 年生 4 名を対象に、本館第 5 講義室で予備審査会を開催した。また、平成 31 年 2 月 14 日（木）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）16 期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、理学療法分野から前期課程 11 題、後期課程 2 題、合計 13 題の発表があった。博士前期課程修了者は 11 名で、病院就職 5 名、一般企業への就職 1 名、行政職への就職 1 名、研究職への就職 1 名、海外留学準備 1 名、博士後期課程進学者 2 名であった。博士後期課程については 2 名、および満期退学者 1 名が学位を修得した。3 月 13 日（水）には前期課程 1 年生（17 期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から 10 題の発表があった。

2 月 24 日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成 30 年度卒業生 22 名が受験した。3 月 25 日（月）には保健学科第 18 期生の卒業式が執り行

われた。本専攻は、編入学生を含め 22 名の新卒業者を世に送り出した。そのうち 14 名が病院に就職し、6 名が大学院（そのうち 1 名が他大学）へ進学した。

2月14日(木)には、平成31年度大学院入学者のための大学院説明会が開催された。

3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下のとおりである。

- 山田 純生 教授 : デジタルヘルスによる虚血性心疾患の重症化予防健保組合員を対象とするリスク因子の重症化予防電気刺激を併用した骨格筋機能改善
- 内山 靖 教授 : 姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究、症候障害学理学療法学教育に関する実践的研究
- 亀高 諭 教授 : 筋芽細胞の膜融合過程の調節機構遺伝性痙性対麻痺の原因遺伝子群（SPG 遺伝子群）の機能解析、がん悪液質性筋萎縮に対するリハビリテーションの分子科学的検討筋損傷からの治癒過程を促進する分子の探索
- 杉浦 英志 教授 : がん悪液質による二次性サルコペニアの疫学的研究、小児運動器疾患の予防的介入研究ロコモ・フレイル・サルコペニアのレジストリ研究
- 李 佐知子 准教授 : 脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究、大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究
- 松井 佑介 准教授 : 生命科学、医科学および健康科学を対象としたデータサイエンス手法、ソフトウェア開発およびデータ解析、疾患特異的な分子メカニズムの理解と分子標的の同定を目的とした大規模オミックスデータ解析手法の開発、ヘルスケアに関わるセンシングデータに対する解析手法の開発
- 野鷲 一平 助教 : ヒトを対象とした運動学習に伴う脳の可塑的变化の研究およびその臨床応用研究

井上 倫恵 助教 : 骨盤底機能障害に対するリハビリテーションに関する研究
産後の女性におけるマイナートラブルに関する研究

なお、本年度末に、野寫一平助教が退職された。

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月25日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習試験（OSCE）の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、秋学期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、第21回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月13日（木）～14（金）、担当：秋田大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月10日（金）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて山田教授、杉浦教授が説明した。本専攻の説明会には約200名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さがうかがわれた。

10月26日（金）には地震防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加した。

（主任：亀高 諭）

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻（平成30年度）

本学作業療法学講座および作業療法学専攻(以下 本講座)は、作業療法学が探求する人間の体や病気の知識を基本に、人間の生活を科学的に分析し、障害がある方への支援の応用する学問構築に勤めている。また、我が国の作業療法学の半世紀を超える実践での蓄積は、様々な作業活動を介し、社会生活を制限する障害を改善・軽減することや生活環境の調整によって、障害を持つ方々のその方らしい社会生活を営むための支援や援助により、個々の社会的ニーズに即応して高い保健・医療・福祉の領域に貢献している。

昭和59年4月(1984年)に本学に開設された先の名古屋大学医療技術短期大学部・理学療法学科及び作業療法学科設置以降、平成14年4月(2002年)には名古屋大学大学院医学研究科を医学系研究科に改称し、医学系研究科に修士課程看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻が設置された。また、平成16年4月(2004年)博士課程(後期課程)設置され医学系研究科修士課程看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻は博士課程(前期課程・後期課程)となった。

今日に至るまで、本講座はリハビリテーション医療における学問体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を主眼に歩みを続けている。また、作業療法士専門職教員と医系教員より構成され、各教員の専門領域を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に向けて鋭意努力している。作業療法学における脳神経機能とヒトの行為との関係、新たな支援技術提案・開発、激変する超高齢化や少子化に伴う国内社会構造の多様化に密着した臨床研究など、国内外の先進的な作業療法学の専門性を探求してきた。

学部4年教育では研究法学んだ卒業研究や短期海外研修を通じ、高度な専門性と国際性を身につけた作業療法士の育成を積極的に推進している。また、令和2年(2020)に施行となる理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正に即応し、臨床実習と学部教育内容の事前検討と再考を迅速に進めてきている。

大学院教育では、リハビリテーション医学や作業療法領域での科学技術や研究開発の発展に国際的に寄与できる研究者と高度専門職業人の育成を目指し、学生教員が一体となってその拡充に努めている。博士前期課程では、保健学という幅広く学際的な視点をベースとし、より専門性の高い作業療法学の習得を主眼としている。

学問の拡充に欠くことの出来ない EBM (Evidence Based Medicine : 根拠に基づく医療) の発展のため、臨床領域で研究を継続するための研究技術の習得や、保健学の基礎となる医療管理学や福祉学、作業療法の高い技術習得を目的としたリハビリテーション臨床実践実習など、研究と臨床的活動の両者を踏まえた教育・研究活動を推進している。

また博士後期課程では、前期課程から引き続き研究に従事し、その成果を発信し発展することのできる国際的な研究職の育成を目指し、多彩な研究活動を推進している。これまでの多くの修了生は国内外で研究活動を継続し、次世代を育成する役割を担って活

躍している。

1. 講座運営

平成 30 年度の本講座は、千島 教授（主任）ほか 3 名の教授，准教授 3 名，講師 1 名，助教 1 名の計 9 名の専任教員により運営された。平成 30 年 9 月末日をもって長年にわたり当講座を牽引されてきた清水 英樹 准教授がご退任された。

本講座の年度運営は，全教員が参加する専攻会議（毎週水曜日開催）によって学部教育および研究活動の具体的な年次進行に沿った活動方針を決定している。本会議では，学生の教育に関する事案（成績関連，単位認定，進級関連，国家試験関連，卒後進路など），学部学生生活に関する事案，短期・長期の臨床実習に関する事案（実習計画，臨床実習施設との連携および実習施設指導者会議運営など），本学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせた年間行事，事業についての計画とその進行状況，年度専攻予算に関する事案，その他保健学科全体の諸課題についての講座としての方針や考え方を討議決定している。特に個々の学生への指導など，具体的な教育課題について詳細な検討や課題解決への方策を合議により決定している。また，人事など教授専任事項については随時，講座教授会議にて審議している。本会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議（毎週第 1・第 3 水曜日開催）を設け，両講座の全教員が参加し，共通する課題検討に取り組み，連携・協力を図っている。大学院運営の機構としては両講座同席によるリハビリテーション療法学専攻会議を月に 1 回の定例で開いている。

2. 平成 31 年度大学院，学部の教育活動

作業療法学専攻の平成 31 年度入学学部学生は 22 名であった。選抜方法による内訳は，推薦入試で入学した学生は 2 名，前期日程試験で入学した学生は 20 名。性別では男子学生 6 名，女子学生 16 名であった。平成 30 年度入試より 2 年次編入学制度は募集を停止した。

平成 31 年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には 8 名。性別では男子学生 2 名，女子学生 6 名が入学した。一般選抜による入学生は 8 名で社会人特別選抜による入学生 0 名で，8 名とも内部学部卒業生であった。また，平成 31 年度入試の博士課程後期課程作業療法学講座には 1 名。女子学生 1 名が一般選抜により入学した。

- 1) 学部新生・編入生および大学院新生のガイダンスを実施している。毎年度始めには新生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施

し、当該年度における教育内容、学生生活に関する説明と確認を行っている。本年度は特に大幸キャンパス整備工事に関わる大学生生活上の安全衛生に関する諸注意を中心として、大学生として守るべき個人情報に関する注意事項など、情報化社会に対応した諸注意を中心に実施した。大学における学修と生活の基本的内容については、作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い、個別の内容について講座別にガイダンスを行った。この時期、作業療法学専攻4年生については臨床実習が既に始まっているため、ガイダンスは前年度末までに実施することとしている。

- 2) 平成30年4月14日(土)・15日(日)：通称「犬山ガイダンス」は、一泊二日の日程で行われる学部新入学生・在校生合同(臨床実習に参加している学部4年生を除く)の年度当初ガイダンスである。昨年同様に愛知県犬山市犬山国際ユースホテルで開催された。全教員、新入生、新2年生、新3年生が集合し、教員紹介・学生紹介の後、専攻ガイダンスを実施した。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され、全教員や2年生3年生からの公私による示唆や助言などを通して実施された。夕食後新2年生を中心とした親睦会が行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。新2年生が編纂する小冊子が配布され、作業療法学専攻に関わる教員と学生間での親睦に活用された。本ガイダンスについては、今後の開催時期や方法について議論を進めており、実施継続に関する再検討を専攻内で協議を進めている。
- 3) 平成30年4月3日(月)から8月10日(金)：4年生臨床実習の実施。学部4年生を対象とし最終年次前期期間中、学内外の臨床施設(名古屋大学医学部附属病院を含め62施設)にて臨床実習を行った。実習期間を3期に分け、臨床実習Ⅰ(身体障害分野)、臨床実習Ⅱ(精神障害分野)、臨床実習Ⅲ(発達障害分野および老年期障害分野)の医療機関・施設で臨床実習を行なった。Ⅰ期：4月2日(月)から5月11日(金)に実施。Ⅱ期：5月21日(月)から6月29日(金)に実施。Ⅲ期：7月2日(月)から8月10日(金)に実施。4年生の学外臨床実習に際しては、各施設に担当教員を事前に配置し、学生の学修状況や体調、実習の進捗状況を把握するように努めている。個々の学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され、問題の生じた事項については全教員で審議して指導対応した。指導教員、実習担当教員、施設担当教員、実習担当教員が各対応を進めた。
- 4) 平成30年6月27日(水)：大学院博士後期課程2年次中間発表会。リハビリテーション療法学専攻2年生に在籍する大学院生6名(内、作業療法学講座2名)が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員から助言・指導を受けた。
- 5) 平成30年8月10日(水)：大幸キャンパス・オープンキャンパス開催。本キャンパ

スにおいて、保健学科全体では大学教育理念、大学院、アドミッションポリシーなどを、専攻別説明会では学内の作業療法学専攻関連施設を小グループに分割してツアー形式での説明会を実施した。説明会参加者に対して講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について教員より説明した。午前33名（昨年57名）、午後34名（昨年29名）の参加があった。保健学科全体では総参加者864（昨年985名）であり、愛知県・岐阜県・静岡県からの参加者が8割を占めた。本年度も保護者からの参加希望があった。

- 6) 平成30年8月29日（水）：大学院博士課程前期課程入学試験。
- 7) 平成30年8月30日（木）：大学院博士課程後期課程入学試験。
- 8) 平成30年9月8日（土）：卒業研究中間発表会（学部4年生22名）。卒業研究の途中経過の報告と教員による助言・指導があった。
- 9) 平成29年9月18日（火）～27日（木）：作業療法入門実習（学部1年生20名）。本専攻入学後の最初の臨床実習となる。作業療法における主要な分野（身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野）の関連の機関・施設6ヶ所の見学を中心とした実習を実施した。終了後、教員が同席してのセミナーを実施した。
- 10) 平成30年9月19～12月6日：作業療法基礎学実習（学部2年生18名）。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で2年後期に実施している。学生は、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野及び老年期分野の4領域の医療機関・施設のうち38か所で基礎額実習を実施した。学生1人あたり1か所の実習は3日間とした。12月12日（水）に精神障害分野5施設、発達分野1施設、身体障害分野3施設について各領域ごとに担当教員が同席してのセミナーを実施した。
- 11) 平成30年12月15日（土）：卒業研究発表会（学部4年生22名）。卒業研究の最終発表会であり、続いて論文の編集・作成が行われた、本研究発表会の内容は「名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻 卒業研究論文集 第18巻」として発刊した。
- 12) 平成31年度センター試験：1月19（土）と20日（日）の両日に実施。
- 13) 平成31年2月11日（月）：学部の推薦入学試験。
- 14) 平成31年2月14日（木）：リハビリテーション療法学 大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会を実施した。作業療法学講座からは博士前期課程3名、博士後期課程1名の発表を行なった。

- 15) 平成 31 年 2 月 14 日 (木) : 一般学生 15 名, 社会人 4 名 (計 19 名) の参加があった。大学院説明会開催時期について 4 年生が臨床実習期間中のため, 内部進学希望者が参加できる日程と内容を検討することとしている。
- 16) 平成 31 年 2 月 21 日 (木) : 臨床実習指導者会議を開催した。4 年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて, 臨床実習指導者会議を開催した。次年度の実習展開について, 当専攻で検討してきた従前からの臨床実習展開で課題となってきた学生負担軽減と指導教員の訪問指導負担の効率的な軽減に向けた再検討を行ってきた。次年度からの臨床実習指導の変更内容について臨床実習教授より説明した。同講演はビデオ撮影し, 当該専攻ホームページにおいて, 本専攻での臨床実習内容の変更点を各依頼施設において閲覧できるようアップロードして臨床実習指導についての専用ページを開設した。次年度からの実施にあたっては各期実施において, 本学内指導の日を設け, 学生と教員間で報告・検討会を実施することとした。学生から要望がある場合には施設担当教員との面談指導を可能とした。学生の課題としては, 各期の学内指導日の一週間前までに施設担当教員にメールにて実習の進捗状況, その時点での改善課題, 対応が必要な問題点などを報告することとした。施設担当教員は以上の内容を学生との間で状況把握すると同時に指導を進める。また, 施設担当教員は事前に施設において希望した訪問対応, 電話対応, メール対応などの方法で, 実習施設の指導者との間で学生の実習状況の把握に努め, 調整及び指導を迅速に進められるものとした。また, 会議では定例報告として平成 29 年度臨床実習結果を報告した。大学からの各臨床実習の到達目標設定と学生評価, 長期の臨床実習に発展させる上での基礎学実習の重要性と進め方を再度説明し, 昨年より実施している学内指導日を設けた実習計画変更内容を再度説明した。
- 17) 平成 31 年 2 月 24 日 (日) 第 54 回理学療法士作業療法士国家試験。本専攻から卒業予定者 21 名が受験した。
- 18) 平成 31 年 3 月 4 日 (月) : OSCE (客観的臨床能力試験)「臨床応用学実習」を学部 3 年生 (20 名) を対象に実施した。
- 19) 平成 31 年 3 月 13 日 (水) : 博士課程前期課程中間発表会。前期課程 1 年在籍の 15 名 (内作業療法学専攻 5 名) が研究の進捗状況を報告した。
- 20) 平成 31 年 3 月 25 日 (月) : 学部および大学院卒業式。本年度は学部学生 21 名 (男性 5 名, 女性 16 名) が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号 3 名 (男性 2 名, 女性 1 名), 博士号 1 名 (男性 1 名) の取得があった。

21) 平成 31 年 3 月 25 日 (月) : 理学療法士作業療法士国家試験合格発表。本専攻 20 名が合格, 1 名が不合格であった。

3. 国際交流

平成 30 年 11 月 2 日 (金) から 3 月 9 日 (金) の期間, 名古屋-延世大学学術研究交流事業として韓国 延世大学作業療法学大学より本専攻に修士大学院学生 4 名が来日。2 日夜に全体歓迎会を実施。3 日 (土) 本専攻主催の研究報告会を実施。延世大学より 4 名, 本専攻から 4 名の英語発表による研究会を開催し, 質疑応答, 意見交換を含めて大学間交流を図った。5 日 (月) から 8 日 (木) の期間は, 附属病院をはじめとした関連施設見学と当該専攻教員の研究室訪問を行い, 積極的な意見交換を行った。平成 31 年 2 月 25 日 (月) から 3 月 4 日 (月) : 平成 31 年度名古屋-延世大学学術研究交流事業として, 韓国 延世大学作業療法学大学に本学より修士大学院生 2 名 (M2 : 2 名) が訪問。延世大学作業療法学専攻の各教員及び学生との交流を進めた。当該専攻学生は日本国内の医療事情を含めた作業療法実践の現況を報告し, 大学教員及び学生間で意見交換を積極的に行った。

4. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが, 企業や他施設との共同研究も積極的に推進している。今後の大学院教育の拡充を念頭に置いた改組計画が推されており, 次年度計画を加味した今後の本学大学院教育の検討を進めた。

4-1. 個人研究

- 1) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果 (辛島)
- 2) 特別支援教育・作業療法士と教員のための環境因子観察表の開発 (辛島)
- 3) 社会脳に関する fMRI 研究 (飯高)
- 4) 扁桃体と顔認知の脳画像研究 (飯高)
- 5) 安静時 fMRI を用いた精神疾患の補助的診断方法の開発 (飯高)
- 6) 精神疾患の脳画像研究 (飯高)
- 7) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究 (寶珠山)

- 8) 安静時と課題時の脳磁図による脳活動解析（寶珠山）
- 9) 重度神経疾患（児）の生活支援に向けた新たな支援技術開発（千島）
- 10) 脳波応用による生活支援技術の研究（Brain-Computer Interface 研究）（千島）
- 11) ヒトの運動情報処理機構と運動障害に関わる基礎的研究（千島）
- 12) 運動学習における関節運動の変化に関する研究（清水）
- 13) 感覚入力情報の違いが作業効率に及ぼす影響に関する研究（清水）
- 14) 日常生活活動に及ぼす手指関節の可動域の影響に関する研究（清水）
- 15) 高齢者の運転行動における自己統制に関する研究（伊藤）
- 16) 高次脳機能障害者の実車運転評価に関する研究（伊藤）
- 17) 体性感覚刺激に対する関連脳領域間の機能連関の経時的変化に関する研究（上村）
- 18) 運動感覚イメージ課題による関連皮質領域ならびに皮質間連絡の賦活に関する研究（上村）
- 19) 要介護高齢者の活動・参加に関する研究（上村）
- 20) 作業療法老年期領域における活動・参加の評価法に関する研究（上村）
- 21) 精神障害者の地域生活支援に関する研究（星野）
- 22) うつ病女性の育児支援に関する研究（星野）
- 23) 認知課題と子供の座位姿勢に関する研究（五十嵐）

4-2. 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者のQOLに関する研究：寶珠山・清水・上村・星野）
- 2) 厚生労働省科学研究事業（複合性局所疼痛症候群の評価に関する研究（寶珠山）
- 3) 日本語入力BCIシステムの臨床応用の研究（工学研究科）（寶珠山）
- 4) てんかん患者における脳磁図及び脳画像解析（医学系研究科・小児科，脳神経外科）（寶珠山）
- 5) 手の外科領域における感覚障害と疼痛緩和効果に関する研究（医学系研究科・手の外科，リハビリテーション部）（寶珠山）
- 6) ASD児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究（花ノ木医療福祉センター）（辛島）
- 7) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究（関西福祉科学大学）（伊藤）
- 8) 脳卒中患者の自動車運転再開に関する研究（公益財団法人丹後中央病院）（伊藤）
- 9) 高次脳機能障害者の実車運転における行動特徴に関する研究（名古屋市総合リハビリテーションセンター）（伊藤）
- 10) 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト（医学系研究科，精神医学）（飯高）

- 11) 相互主体性の解析に基づく社会行動の神経基盤と発達過程の解明（生理学研究所）（飯高）
- 12) 脳・生活・人生の統合失調症的理解にもとづく思春期からの主体価値発展学（東京大学その他）（飯高）
- 13) Resting State fMRI と脳波の同時計測によるケア手法の有効性検証プロトコルの開発（長寿医療研究センター）（飯高）
- 14) 脳機能データ解析用ソフトウェアの開発（メディカル・トライ・システム社）（飯高）
- 15) 摂食障害患者に対するリハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究（医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部）（星野）
- 16) 外来統合失調症患者に対する認知リハビリテーションの効果検証（医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部）（星野）
- 17) うつ病女性に対するリハビリテーションの開発（愛知医科大学・愛知淑徳大学）（星野）
- 18) 統合失調症患者の時間使用に関する研究（医学部附属病院リハビリテーション部・楠メンタルホスピタル・北勢病院・心療センターひなが・松蔭病院・北津島病院・榊原病院）（星野）

（主任：千島 亮）

暮らしと健康を守る最新検査法

— 研究者に会いに行こう —

・名古屋大学大学院医学系研究科 ・名古屋大学医学部保健学科

本学は昭和58年以来、大学での研究成果や知的財産を地域の皆様に還元することを目的として、健康や医療に関わるテーマで一般市民の皆様を対象とした公開講座を開催してまいりました。今年、「暮らしと健康を守る最新検査法」と題して3つの講義を開講します。研究に関心のある方、最新の知見を勉強(収集)したい方、研究者をめざしている方など皆様のご来場をお待ちしております。

**受講料
無料**

2018.10.20 sat
10:00-12:20

**名古屋大学大幸キャンパス
東館4階大講義室**
(展示場所は本館2階第1講義室)

[定員] 80名 事前の申し込みが必要です。

※当日直接ご来場された場合でも席に余裕があれば受講いただくことができます。

講座内容

第1講 10:00-10:30

**からだに侵入した殺虫剤の
モニタリング技術**

[内容] 私の研究室では、日常的に使用している殺虫剤(農薬を含む)がわたしたちの健康に影響しているかどうかを評価するための手法を開発しています。本講座では、わたしたちの研究の一つである「使用済みオムツを用いた高感度殺虫剤曝露マーカー測定法の開発」を例に、研究開発の一連の流れ(発案、開発、実践応用等)をわかりやすく紹介します。

(名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・准教授) **上山 純**



第2講 10:30-11:00

**大幸キャンパスで最近発見した
新規静脈血栓症リスクとその検査法**

[内容] 止血のために血液は凝固しますが、血管内では凝固しないようにコントロールされています。私たちは血栓症を発症してしまった患者さんがどうしてうまくコントロールできなかったのかを追求し、これまで知られていなかった血栓症リスクを発見、その検査法を開発しました。それらの経緯をご紹介します。

(名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・客員研究者) **高木 明**



第3講 11:00-11:30

**肺癌のバイオマーカー検査の
進歩と個別化治療**

[内容] 私の研究室は肺癌の新たな創薬開発につながるような治療標的の発見を目指しています。肺癌は、これまでの基礎的研究の臨床応用によりバイオマーカー検査に基づいた個別化治療が最も進んでいる癌の一つです。本講座では、肺癌の個別化治療の現状と今後の展望をご紹介します。

(名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・教授) **佐藤 光夫**



展示 11:30-12:20

顕微鏡で臓器を見てみよう。研究について尋ねてみよう。

病理標本の観察と、教員や大学院生による研究紹介を行います。

お申し込み方法

- ▶ はがき、ファクス、または電子メールのいずれかでお申し込みください。
- ▶ お申し込みには、【市民公開講座申し込み】と明記のうえ、氏名(フリガナ)及び連絡先を必ず記入してください。
- ※ 電子メールの場合、表題を【市民公開講座申し込み】としてください。
- ▶ 締め切り: **10月6日(金) 到着分**
- ※ 受講可能な場合、お申し込みへの返信はいたしません。

お申し込み先

T461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20
名古屋大学大学院医学系研究科(保健学)教務学生係
Fax: 052-719-1506
E-mail: ihogakumu@adm.nagoya-u.ac.jp(申込み専用)

その他

受講申込時に記載された個人情報等は、本公開講座の運営のみに利用させていただきます。また名古屋市に暴風警報が発令され、午前8時までに解除されない場合や災害や感染症の流行等が生じた場合には、公開講座は中止とさせていただきます。その際は、本研究科ホームページ(<http://www.met.nagoya-u.ac.jp/>)上でお知らせしますので、開講前には特にご注意願います。

後援

愛知県看護協会、愛知県診療放射線技師会、愛知県臨床検査技師会、愛知県理学療法士会、愛知県作業療法士会

会場への交通案内

▶ 名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅下車(1番出口)徒歩5分



平成30年度大学院医学系研究科(保健学)市民公開講座 アンケート集計結果

①性別、②年齢構成						⑦実施方法について	
	男	女	その他	計	%	A全体の時間について	
10代	4	10	0	14	25%	計	%
20代	1	0	0	1	2%	丁度よい	49 89%
30代	0	1	0	1	2%	長い	0 0%
40代	3	4	0	7	13%	短い	5 9%
50代	1	4	0	5	9%	未記入	1 2%
60代	4	3	0	7	13%	計	55 100%
70代	7	6	0	13	24%	Bテーマ毎の時間について	
80代以上	1	5	0	6	11%	計	%
未記入	0	1	0	1	2%	丁度よい	39 71%
計	21	34	0	55	100%	長い	0 0%
③職業						C講演形式について	
	男	女	その他	計	%	計	%
学生	5	11	0	16	29%	講演型式	37 67%
会社員	5	6	0	11	20%	参加型セミナー	11 20%
自営業	2	0	0	2	4%	その他(講演、参加型を半々)	4 7%
主婦/主夫	0	9	0	9	16%	未記入	3 5%
無職	6	5	0	11	20%	計	55 100%
その他	2	3	0	5	9%		
未記入	1	0	0	1	2%		
計	21	34	0	55	100%		
④本学の卒業生か							
	男	女	その他	計	%		
はい	3	2	0	5	9%		
いいえ	18	30	0	48	87%		
未記入	0	2	0	2	4%		
計	21	34	0	55	100%		
⑤本講座を何で知りましたか(複数回答あり)							
	男	女	その他	計	%		
新聞、TV	1	2	0	3	6%		
区役所	0	0	0	0	0%		
生涯学習セン	0	0	0	0	0%		
図書館	2	0	0	2	4%		
友人情報	2	2	0	4	7%		
お学科からの案内	11	12	0	23	43%		
ホームページ	5	17	0	22	41%		
その他	0	0	0	0	0%		
未記入	0	0	0	0	0%		
計	21	33	0	54	100%		
⑥感想を聞かせてください							
	男	女	その他	計	%		
役に立った	15	19	0	34	62%		
まあ役に立った	5	10	0	15	27%		
より詳しくなりたかった	0	0	0	0	0%		
その他	0	2	0	2	4%		
未記入	1	3	0	4	7%		
計	21	34	0	55	100%		

D【今後希望するテーマ】			
●喫煙、飲酒の影響の研究をされていれば公開講座を希望します。			
●予防医学のテーマ／遺伝子→病気→予防／老化に伴うケアー医学			
●免疫系免疫系の研究			
●認知症／大腸がん／産まれてから死ぬまでの脳の変化進化			
●上山先生曝露調査の結果なども知りたい			
●最新の医療の話／ゲノム修飾			
【感想】			
●むずかしかった			
●それぞれのお話の内容が参考になった			
●難しいところもありましたが、その中でも、身近に感じるお話もありためになりました。			
●講師の紹介時間が長い			

<まとめ>

本年度の市民公開講座は、医療技術学専攻病態解析学講座が担当しました。メインタイトルを「暮らしと健康を守る最新検査法 -研究者に会いに行こう-」とし、研究者をめざす若者や興味のある方を対象として、生体試料を用いた検査技術に関する最新のトピックを、3名の講師を選出して講演を行いました。

第1講は、「からだに侵入した殺虫剤のモニタリング技術」という演題で、名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・准教授 上山純 先生から、おむつを利用した高感度尿中化学物質測定法の開発経緯から応用についてご講演いただきました。

第2講は、「大幸キャンパスで最近発見した新規静脈血栓症リスクとその検査法」という演題で、名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・客員研究者 高木明 先生からは、血栓症発症リスクの基礎からその検査法についてご講演いただきました。

第3講は、「肺癌のバイオマーカー検査の進歩と個別化治療」という演題で、名古屋大学大学院医学系研究科 病態解析学講座・教授 佐藤光夫 先生から、肺癌の薬物療法の個別化医療に必要な検査法などをご紹介いただきました。

展示企画には「顕微鏡で臓器を見てみよう。研究について大学院生に聞いてみよう。」と題して、講座の大学院生や若手研究者からの研究発表をポスター形式で行いました。

(平成30年度地域貢献委員会委員長：上山 純)